【 5月23日（土）「いじめ・自死・殺害事件を考えるつどい」村山士郎講演】

５月２３日（土）１３：３０～、札幌市内にて、大東文化大学名誉教授の村山士郎さんをお招きし、「いじめ・自死・殺害事件を考えるつどい」を開催しました。この講演会は、「子どもと教育・文化　道民の会」とともに、北海道子どもセンター／さっぽろ子育てネットワーク／認定ＮＰＯ法人北海道自由が丘学園／北海道教育科学研究会／北海道民間教育団体連絡協議会／全北海道教職員組合／北海道高等学校教職員組合／ＤＣＩさっぽろセクション／新日本婦人の会北海道本部の１０団体の共催で行われました。

共催での呼びかけに札幌市周辺の方以外にも釧路・八雲・登別など遠方からも多くの方が駆けつけていただき会場あふれんばかりの１６０名が参加されました。

北海道・札幌においてもいじめによる自殺は毎年おきています。また、２月「川崎中1殺害事件」というショッキングな事件も起きました。

いまあらためて「子どもたちに何がおきているのか」「その背景にあるもの」「大人がどう寄り添ったらいいのか」などについて考えていかなければならないときでもあり、長年、いじめや少年事件を研究されてきた村山士郎さんに講演していたける機会ができたことタイムリーだったと思います。

村山さんのお話を、当日参加できなかった会員のみなさんにも是非読んでいただきたいと思い、講演をほぼ全体を集録しました。

村山さんは著書「いじめで遊ぶ子どもたち～子どもたちに安心と信頼の生活世界を～」の中にも見られるとおり、大津 A 中学いじめ自殺事件はじめ多くの悲しい事件を通して、子どもと私たち大人がどう関わるか、多くのことを発信されています。ご一読ください。

いじめで遊ぶ子どもたち
ー　連続する少年事件を手がかりに現代の子どもを読む　ー

村山士郎（大東文化大学　名誉教授）

ご紹介受けました村山です。僕は 70 歳になって 3 月に大学を退職して、のんびりとした生活をおくっています。70 歳になると民間教育団体もみんな卒業させてくれるので、肩書きが何もなくなりました。

スケジュールの手帳が非常にきれいになりました。今まで猛烈に忙しい中で動き回っていたので、こんなにのんびりしてていいのかと時々不安になります。

今日のテーマ「いじめで遊ぶ子どもたち」という題は、講演には必ずしもふさわしくないテーマかもしれません。本当は「子どもたちはなぜ人を殺してみたいという願望にとりつかれるのか」というようなテーマなんだろうと思います。そのなかにいじめ事件がふくまれているというふうに考えてください。

１ ）人を殺してみたい願望の暴発　ー連続する少年事件をどうみるかー

昨年の 7 月に、佐世保で高校の女子生徒が友人を自分の部屋に招き入れて殺害をしました。ただ殺害をしただけでなく、死体に様々な手を加えている、切断もするということをやっているという事件です。彼女はずっと人を殺してみたいということを考えていたようです。

北海道では 10 月に南幌町というところで 17 歳の高校生がおばあちゃんとお母さんを殺害するという事件が起きています。これは背景がち

ょっと違いますが、殺すことにおいては偶然的ではなく同じで、かなり前から考えていたようです。

12 月には、名古屋大学の女子学生が知り合いの 77 歳のおばあさんを殺害し、またこれも人を殺してみたかったと語っています。実家は宮城県にあるらしいですが、高校時代にタウリンという毒物を友達に盛っていたりしています。タウリンという毒物はよく知りませんが、何年か前に静岡県で女の子がお母さんにタウリンを盛って、ずっと日記につけていた事件がありました。

今年の 2 月になって川崎市で 17 歳と 18 歳の少年たちが、河原で中学１年生の男の子を殺害をして、放置をするという事件がありました。これはもう大きな報道になったわけですが、殺された少年は当日、2 月の寒い多摩川で何度も裸で泳がされて、そして上がってきたところをカッターナイフで何度も斬られて死んでしまうという凄惨な事件です。

これも、愛知や佐世保の子どもとはちょっと性格が違いますが、18 歳の少年は友達とお酒を飲むとよく「人を殺してみたい」と言っていたということが伝えられています。

報道はあまりされなかったんですが、その他にもいくつか事件が続いているわけです。例えば 5 月 18 日ですか、横浜の戸塚区で高１の少年が母を殺害している。これは、お母さんとおばあさんから勉強や生徒態度にガミガミ言われカッとなってやったとのげています。

その少し前、千葉で女の子を誘拐したのか拉致したのか、用意していた畑の穴の中に生き埋めにしたのではないかと言われています。これもまた明らかに生きたまま埋めたとすれば、そういうことに単に殺すだけでなく、その行為そのものを楽しむとか、やってみたいというふうに何か興味をそそがれるという気持ちがあって、こうなったのではないか。ただ、消すだけならもっと違う消し方があるわけです。でも、前もって穴を掘っておいてですよ、そこに車で連れて行って生き埋めにするっていうのは、その行為それ自体に非常にこだわっているふしがあるわけです。

こうやっていくつかの事件を話してみますと、怨みを持ってカッとなって人を殺すことや、あるいは遊び的になぶりものにして人を殺すようなこと、それからある時期から人を殺してみたいという願望にとりつかれてそれを決行してしまう事件が続いているわけです。

これらの事件はバラバラと報道され、一連の今の日本の子どもたちの事件の中にある不安感のみたいなものが充満し、強い攻撃性を抱えているじゃないかと考えて、問題を根本から考え直してみようとはなかなかならない。

一つの事件が終わると、もうすでに過去のものになり、また新しい事件が起きるとそれは一生懸命報道するんだけど、前との事件がどうだったのかということもあまり問われず、そして私たちも忙しいですから、「ああ、そういえばそういう事件があったな」とか「ああ、そういえばこういう事件があったな」といったかっこうで、時が流れていくままに事件が放置されてしまうことになってきたわけです。

資料の中に入っています『村山士郎教育論集』これも宣伝したいんですが、中を開いてもらって２巻と３巻というところに、２巻は『現代の子どもといじめ事件』、３巻は『社会病理としての少年事件』というタイトルですが、若い方もいらっしゃいますが、実は日本の社会の中で、もう３０年間もこういう事件が繰り返し繰り返し続いてきたわけです。

例えば２巻の中で、青森県の野辺地中学校で熊沢憲君がいじめにあって自殺したのが 1985 年です。そのあと愛知県で大河内清輝君が自殺をしたのは、これが 1994 年ですね。そのあと福岡の森啓祐君、彼が自殺したのが 2006 年です。そしてつい数年前に大津でいじめ自殺事件があったわけです。

インターネットに出ていたので、誰が作ったのか知りませんが、1970 年代の後半からいじめ

で自殺した日本の子どもは１２１名。そのあとの自殺者を僕が計算してみるとだいたい明らかになっているだけで、１５０名ぐらいの子どもがいじめで自殺してるんです。

だから、実はもう３０年も３５年も前からこういう事件が続いているわけです。子どもに対して日本の社会や大人が本当の意味で責任を果たしてこなかったんではないかと問われているんではないかと思うわけです。

また、人を殺してみたいという願望ということも決して今に始まったことではありません。

３巻に納めてありますが、1989 年の女子高校生監禁殺害事件、コンクリート殺人事件と言われていますが、東京で起きました。女子高校生を監禁して性の対象にし、４０日間監禁したんです。そして最後にその子が亡くなったときに、こともあろうにドラム缶に入れてコンクリートを詰め込んで荒川の河川敷に放置した。同じ年に宮崎勤青年の事件で連続幼女誘拐殺人事件。７人もの幼女を誘拐して次から次へと殺害し、一部の子どもを庭で焼いてですね、その骨をお母さんの家に送りつけるという、そういう事件です。

その後はみなさんもよくご存じの神戸の少年Ａによる子どもの殺害事件が起きました。土師惇くんという小学４年生の男の子を殺害して首を切断してその首を自宅に持ち帰って風呂場でそれをきれいに洗って自分の部屋に持ち帰り自分と一緒に一泊をし、次の日中学校の校門にさらしたという事件。あまりにも有名な事件です。

その後も、例えば栃木の女教師をナイフで殺傷する事件や大阪の家族全員殺害事件という高校生たちの事件や佐世保事件の１０年前の事件。小学校６年生の学校の教室で友人を６年生の女の子がカッターナイフで殺す事件です。給食前の時間、さとみちゃんという子はカッターナイフによって殺害されてしまう。その後いろんなかたちでやはり人を殺してみたいという事件は、ずっと継続して起きているわけです。今あげた事件は、ある意味突出した事件なのですが、今日ではどこの学校でもどこの地域でも起こらないとは言えないんです。しかしよく考えてみると、これは後で少し話しますが、その突出した事件だから他の子は大丈夫だと言えるでしょうか、と我々は問うてみなければならない。

逆にひょっとしたら今こうやって私たちの周りにいる子どもたちも何かのことがあれば、そういう方向へ行くんではないかと思う方が普通ではないかと思います。

川崎の事件は、今日的な背景があります。この前、川崎で簡易宿泊所から出火して焼けましたよね。川崎には１２４ぐらいの宿泊所があって数千の人がそこに住んでいる。横浜にも同じような場所があり、6,000 人ぐらいが住んでいる。同じような簡易宿泊施設は東京にもある大阪にもある。そうした貧困が社会の中にある。その同じ地域の中で子どもたちが荒れているという現状があるんです。だから火事の問題と少年たちが川原で植村君を殺害した事件は全く違った事件のように見えながら、しかし地域的には日本の貧困の状況はそういうところに広がっていると考えると決して別の問題とは考えられないのではないか。

川崎市は、いま渋谷から沿線が通ってものすごいマンションが立ち並んで、田園調布からずっと流れが来ているような地域があると同時に、川崎市のかつての労働者が住んでいた地域が今でも貧困な状況に放置されている。その周りで子どもたちが育っていて、そういう社会の中でああいう事件が起きているんだというふうに考えなければいけないと思うわけです。

２ ）南幌町の祖母･母親殺害事件と今日の虐待

南幌町の事件は資料があまりなくてインターネットで一生懸命探しているんですが、資料集めは必ずしも十分ではありません。

キーワードが虐待だということは、はっきりしていると思います。日本の子どもたちへの虐待は、二つのタイプがあると思うんですよね。一つはさっき川崎で言ったような貧困や古典的な虐待ですよね。もう一つは、虐待あるとはとは思えないような一種非常に恵まれたように見える環境が実は子どもにとっては虐待的な状況になるタイプです。日本でいえば格差社会の裏と表のようにしてして子どもたちは虐待的な環境にあるというふうに考えられるのではないか。

南幌町の事件のことを読んでいくと、小さいころから厳しく育てられて、犬の散歩や除雪作業といった雑用をさせられて遊ばせてもらえなくて物置のような場所で寝かされるなどの虐待を受けていた。殴る蹴る竹刀で叩く火のついた煙草でたばこを腕に押しつける、トイレを使わせずに風呂は夏でも週一回だけ、冬は庭に立たせて水をかけるなどなどのことが報じられていますが、でも、この子は部活もしっかりやり生徒会長の候補にもなっていた。そういう意味では健気に一生懸命頑張っていたのだろうと思います。しかしこれ以上我慢がないという格好である意味では切れてしまった状況で殺害行為におよんだ。地域の人たちから大変な同情があって嘆願書も出ている。日本で児童虐待というのはもちろん相談件数がどんどん増えているわけですが、社会の中でいろんな虐待が広がっているんだろうなと考えられます。

これは新聞記事ですが、例えば高齢者の虐待という問題が新聞に何度か登場しました。8900カ所で NPO が調査をしたら 1500 カ所の施設で高齢者に対する虐待があったということが報じられています。詳しく言うと 15952 件の虐待がカウントされている。施設職員は 221 件でそれにかかわっている。

老人に対して最も手厚く保護しなければならない施設で虐待が起きているって言うのは、職員も相当に切羽詰まっているか、あるいはそういう虐待的な行為に出ざるを得ないような状況に追い込まれてしまっているのか、あるいはそういう追い込まれた中でそういうことをひょっとしたらですよ、いじめと同じようにちょっと楽しんでいる職員がいたのかもわからないというようなことも考えられる。虐待というのは社会の中のある一つの病理で、日本の社会のいろんなところに隠れてあるんだろうというふうに思います。その証拠に、これは日本テレビが報道したんですが、虐待している時に介護職員たちが笑い声をあげながら虐待をしていることがキャッチされて、嫌がる様子を見て面白がっているということがキャッチされたりしているということも言われています。これはある意味、子どもたちが子どもたち同士でいじめをして遊び、楽しくいじめをしているというようなことに近い状況があるのかもわかりません。児童虐待は、年々相談が増えてこれは 2015 年２月の新聞には約 29000 の人の相談件数がある。これはもうずっと増加の一途をたどっています。

別の調査で言うと、児童虐待は最多で 73000 件が寄せられていることも書かれています。これはある意味では日本のどちらかといえば影の部分、全体の貧困な状況に置かれている中でひょっとしたら虐待的なことが行われているかもわからない。でも日本の子供たちはそうした貧困な状態に置かれているから虐待を受けているだけではないんです。

虐待にはもう一つのタイプがあります。2006 年に奈良県で高校１年生の男の子が放火をしてお母さんと妹を殺してしまったという事件がありました。医者の息子さんです。その後の裁判の中でお父さんは「パパが悪かった。お前にたびたび暴力をふるって悪かった。家にいてもずっとパパに監視されていて、家にいるのがつらかったんだろう」ということを言っています。なぜお父さんはそういう行為を続けていたのかといえば、どうしても少年に医学部に入ってもらいたかった。そして少年は勉強を強制的にやらされていた。それをやらないと暴力行為を受けていたという。これは一種の虐待行為です。ですから、この高校の男の子は、本当はその暴

力行為はお父さんに向かわなければいけないんだけど、実際は義理のお母さんと妹さんに向いてしまったという痛ましい事件です。金銭的に困っているわけではなく、とても裕福な家庭です。お父さんもお母さんもお医者さんです。実態はわかりませんが、金銭的には庶民とは違うレベルにあったはずです。

もう一つ皆さん、記憶をたどってほしいんですが、秋葉原事件という有名な事件がありました。犯人は、加藤智広という青年です。彼は青森県の出身ですね。彼もまたお母さんに有名高校に入るように仕向けられて、そしてある意味では虐待を受けていた。加藤は幼少から厳しく育てられて、冬の寒い日に薄着で外に立たされているのをよく見かけられた。小学生のころから珠算やスイミングスクール、学習塾に通わされている。友人の家に遊びに行くことも友人を家に呼ぶことも禁止されていた。

作文や絵は親の検閲が入って、親が相当手を入れて提出させて、いつも賞をもらわないと加藤は、お母さんに怒られていた。

弟が次のように書いています。

食事の途中で母が突然切れると廊下に新聞を敷き詰めてその上にご飯やみそ汁などのその日の食事をばらまく。「そこで食べなさい」と言い放つ。彼はそれを泣きながら新聞紙の上にぶちまけられた食事を食べていた。ぐちゃぐちゃになった状況で「それを食べなさい」と強要されて彼はそれを食べていた。これも虐待だろうと思います。しかし彼は青森県では有数の進学校に入り、その後ドロップアウトするわけです。虐待的環境といっても、学力が高くて教育熱心でそしてある時までは他の人から「すごいなあって」思われた子どもにもこういう事件が起きるわけです。

佐世保の女子高校生の事件、これも資料として入れたんですが、この佐世保の高 1 の女の子もお父さんが弁護士さんで、お母さんは東大を出て地域の様々な教育委員もやられていました。九州の弁護士事務所では NO.1 ぐらいの収入があって、とてもりっぱなおうちに住んでいたという報道がされています。

「少女Ａはこの絵にかいたような裕福なエリート家族で育ち、3 歳からスケート選手のコースに入りピアノや絵でも賞をとる頑張りを見せ、学業もトップクラスの成果を上げてきたのである。この環境自体が少女 A にとっては抑圧システムとして機能していたのではないか。親の期待にこたえようとするあまり強いストレス感を受け、不安感を抱き、それらが、抑圧として蓄積していたと考えられるのである。理想的な家庭環境それ自体が、攻撃エネルギーをため込む抑圧の要因となっていたと考えられるのである」

ですから北海道で起きたおばあちゃんと母さんを殺した南幌町で起きた事件とは性格は異にしています。しかし虐待的抑圧的であったという環境は非常に似ている。結果としてはね。そういう中で子どものゆがんだ攻撃性というものが蓄積されていっているのではないかというふうに僕は考えるわけです。

3)「人を殺してみたい願望」は、子どもたちの攻撃性の病理

私は、80 年代からいじめ事件や少年事件をずっと書いてきたんですか、日本の子どもたちが社会的な病理にあるんだと考えてきました。

学校の先生は、社会病理って言うとなぜかひどく嫌う。多分先生方はいい先生が多いので、自分の力で何とかできるって思っている。子どものことを社会病理だっていうと何だか突き放しているように聞こえてしまうのか、それが見えなくしている原因でもあるんですよね。自分の力で何とかできるというふうに思いこむあまりに、本当の病理が見えない。そういうことではないかと思っているんですが。

どういう病理に日本の子どもたちは罹っているのか、人を殺してみたい願望というのはどう

いう病理なのかということが問題です。先ほど話しました女子高校生監禁事件と宮崎青年の連続幼女誘拐殺人事件が起きた 1989 年に私は僕は雑誌に論文を書いたんです。

病理学的な分野を子どもたちの分析に取り入れて考えないと、子どもの本質は捉えられなくなるのではないか思いました。

先に触れた女子高校生監禁殺人事件の少年たちは、女子高校生を監禁し、性的欲望の対象にしていきました。若い男の子たちにとってみれば若い女子高校生に性的な欲望が向くってことはあると思うんです。

でも、その女子を４０日間も監禁し、風呂にも入れずに汚れた少女に、２０キロもやせたと言われている少女に少年の部屋でなおかつ性的欲望の対象にしていったという、その地獄のような様を知ったときにこれは病理的だと思いました。単なる性的な欲望を果たすというレベルを超えて、それは病理的なサディスティックな感覚が芽生えているのではないかと思ったわけです。

先ほどの宮崎青年は幼女を連れてきて殺害し、時にはそれを庭で燃やして、そのしゃれこうべを部屋に持ってきて大切にもてあそぶ。これは死体愛好です。死体を愛好するネフロフィリア、死体愛好的な病理なのではないか。

ですから、私は１９８９年段階で日本の事件のなかの子ども分析をする時には、サディズムとネクロフィリアという概念が必要だと書きました。そして、E・フロムの『正気の社会』とか『破壊』を一生懸命読み始めたわけです。そうすると日本で起きた事件と同じような事件はアメリカでももう起きていて、その分析をフロムはずっと書いているわけですね。みんなは日本の社会は正気の社会だと思っているとおもいますけど、資本主義が発達するほど、人格は病理的な世界に入っていくと、フロムは語っているわけです。

２０１１年の大津市のいじめいじめの事件を分析してみると、自殺の練習をさせていたなど、とてもサディスティックな感覚が散りばめられているわけです。自殺の練習をさせることの背景にはあのいじめていた子どもたちは、「遊びだ遊びだ」と言いながら、実は死ぬところまで追い込んでみたいというふうにどこかで思っていたんですよ。どこまでいじめたら、こいつは自殺するんだろうかということが、遊びといういじめだったんです。我々から見たらいじめなんだけど、彼らからいえば遊びなんです。遊びのなかにとてもサディスティックな感覚が広がっていて、それで結局自殺に追い込んだわけです。毎日毎日いじめていって、そしてどこまでいじめたらこいつは本当に死ぬんだろうかということを楽しんでいたわけです。

これはもう病理的な感覚そのものなんです。そういうふうに見ていくと、さっき話しました長崎の女子高校生や、名古屋大学の学生は、とても考えられないような残酷な殺し方をしています。同時にその死体をもてあそぶということがあります。切断してみたり大事な自分の宝物のように思って、その死体を自分の作品と思っているような節があるわけですね。これは死体愛好という病理なんですよ。

こういう病理が日本の事件の中には顕著に現れてきていて、かつては犯罪心理学者の小田真が鋭く分析していたのですが、最近は、みんなきれい事ばっかり言って、本当の病理だということをあまり書かなくなったし、言わなくなったし、教育の世界でも少年事件のことはあまり扱わなくなっています。

子ども研究はもっともっと、今子どもに起こっている現実を取り上げて真摯に取り組む必要があると思います。それは現実に現場で子どもと向かい合っている人たちにとってとても大事なテーマであって、本当のことを知りたいし、どういうふうに捉えていけばいいのかというのは、大切な課題だと思います。　研究者は論文を書いて、分析がちがっていたら「ああ、あれは失敗した」と言えば済むわけですけど、（本当は済まないんですが）、現場にいる方はひとつ間

違えば子どもとの関係をこわしてしまうわけですよ。だから、真剣勝負なんですよ毎日毎日が。そういう意味で学校現場は非常に緊迫した状況の中にあるのではないかと思います。教育の世界では本格的に大々的な論議をしようという気運が起きないというのは、すごく残念に思うわけです。

それでは、子どもたちはどうして病理の世界に入っていくのだろうかということが、次の問題ですね。

この問題を考えるときに、二つの視点が必要だと思います。一つは社会的な要因。それは客観的な要因です。もう一つは個性的な特質や生育史的な要因。それは主体的な要因です。客観的な要因は、先ほど話しましたように日本の競争原理や、あるいは格差社会の中で子どもたちの環境になっている。社会や生活や学校というものが子どもたちに不安感や抑圧感、あるいは孤独感を強めているということが、子どもたちの攻撃性というものを強めていると考えられるのです。

私が書いた本のなかでは、五つぐらいのことをあげています。

まず一つは学力競争に組み込まれて生活が時間的にも精神的にも圧迫されている。これは客観的に見て今の子どもたちの状況です。

二つめは、子どもたちは家庭でも学校でも親や教師の要求に忠実に従う、よい子競争にかりたてられている。学力競争だけでなく、良い子競争に駆り立てられているのです。良い子でいないと子どもにとって一番恐ろしい「見放される」という状況に追いやられるのです。先生に見放される、親に見放される、この見放される感覚というのは、今の子どもたちにとってはとても怖いことなんですね。

三つめは、豊かな消費社会の中で育った子どもたちは常に自分の欲望が達成されないという状況にある。欲望をどんどん広げて生活するわけです。それが満たされないと、非常に強い不満やストレス感が生じてイライラが募ってくる。そういう物質的な社会で育った子どもたちの中にある欲望の肥大化現象という要求が満たされないと、強い不満が出てくる。

第四は、彼らをとりまく生活文化の中に忙しさが、これは後でも話しますけども、とにかく他者から抑圧されるのではなくて、自分自身が生活の中に忙しさを持ち込み、追い込んでいるわけです。例えばスマホやゲームに多くの時間をさいて睡眠を削っています。彼らはスマホで荒れゲームで荒れ３時間や４時間はへっちゃらで、やっている子は５時間も６時間もやっているわけです。しかし、疲れないはずがない。だから好んで楽しくやっているように見えながら、体が疲労、そしてイライラ感を募らせているという、そういう構造のなかで彼らは生活をしているというわけです。

そして最後の五つめは、この格差社会が進行すると、やっぱり家庭のなかでも様々な貧困の問題が出てきたりして、そしてそういうことが子どもたちに強い不安感を与えていく社会なんだと。ところが、僕らが冷静に考えれば、日本の子どもたちが育っている環境は子どもにとっては、非常に抑圧的で苛立ちやムカつきを強めるものになっています。彼らは不安感や抑圧感を強めるような環境のなかで生きている。

こういうことが、子どもたちにある攻撃性を病理的に歪めていく要因になる。しかし、今言ったような話は多くの子どもたちが、そういう環境のなかにいるわけです。事件を起こした子どもたちだけがそういう環境にいるわけではない。でも、みんなが事件を起こすかと言えばそうではないわけです。そこには、もう一つ主体的な要因という問題があるわけです。それが生育歴、あるいはその子どもが固有に持っている問題です。

さっき話した青森の加藤君のように、お母さんから非常に強い虐待的な育て方をされたというのは、これは全ての子どもがそういう社会、そういう状況のなかで育てられているわけでは

ありません。その子に固有な、あるいは特徴的な生育歴を残念ながら持っている。そういうことがあるわけです。だから、佐世保の高校生も経済的にはとても恵まれて、お父さんとお母さんから期待され、そして学校でも賞賛されているようではあったけれども、東大に入るということが至上命令でした。お兄さんは残念ながらそれができなかった。東京の私立大学、早稲田大学に入った。すごいと思うんです。それでもお父さんとお母さんの期待には応えなかったので、残っている彼女は、どうしてもそれを達成しなければいけないわけです。高校生にもなってみれば、大体わかるでしょう？自分がそういうところに行ける学力なのか。それは高校生ぐらいになればわかりますよね。そうすれば、そういう抑圧感をいうものが、もっと強く彼女にはかかって、これは全ての子どもに競争原理がかかると言いながら、個別、特別に彼女には特殊な条件が加わるというふうに見なければいけないのだろう。そういう中で、今すごく注目されているのは、小さい時の母子関係というものを、もう一回見直さなければいけないんじゃないかということです。

ついこの前、月刊『文藝春秋』という雑誌がありますが、そこに酒鬼薔薇少年の家裁の決定、裁判所より判決文が全文公開されました。僕は初めて読みました。いろんなものは読んだことがありますが、最終的には裁判所、つまり家裁が、この子はこうだったということを、どう認めたのかということですよね。様々な精神鑑定を行い、その精神鑑定を全部読み込んで、そしてこの子を医療少年院に送るという決定をしました。その時の経緯を説明している文章です。読んでみると、いろんなことが書かれています。

まず少年は母乳で育てられたが、母親は生後１０ヶ月で離乳を強行し、具体的なことはわからないが、鑑定人は１歳まで母子一体の関係の時期が、少年に最低限の満足を与えていなかったと書かれています。最低限の満足というのは、一番低いレベルの満足すら与えられていなかったということです。裏を返せば、全く不満足な状況に置かれていたわけです。これが一つの大きな要因です。

それからこういうことも書いてあります。両親は、長男は我慢が大切で、下のものと争ったら責任を取らなければならないと教えていて、母親が中心となって少年を厳しく叱責をしていた。少年は親の叱責がとても怖くて、泣いてみせると親の怒りがおさまるというのを体験的に知って、悲しい感情がないのに、先回りして泣いてみせるということで逃れていた。そういうことが書かれている。

そのあとを読んでいきますと、小学校の３年生のとき、少年はお母さんの姿が見えなくなったということで、精神科医に連れて行かれたことがある。これは僕は、精神分析したこともないし、その専門ではないですが、素人的に考えると親の姿が見えないというのは、見えなくなって欲しいとか、いつもそういうことを思っていたので、見えないということによって自分の安定を保とうとするのか、よくわかりませんが、そういうことがあった。

小学校４年生のときに、祖母が亡くなって、そしてその時期に神戸の大震災があって、精神的な強いショックを受けたのではないか。小学校の６年生ぐらいになると、猫を殺したり、なめくじに針を刺したりするようなことを始める。それが中学校に入って、ちょうど男の子としての思春期が重なって、猫を虐待したり、殺したりするようになる。そのときに性的な興奮を覚えて、初めてそこで射精を体験する。

ですから、その性衝動というものと、動物を殺すということとが、この思春期の時期に重なってしまう。だから、性的な強い欲望があると、「殺す」ということによって、それが満たされていくということを彼は覚えてしまうということが書かれているわけです。

これは、主体的な要因と言うんですが、どの辺がどこに強く影響したかは、僕はよくわかりませんが、その小さい時からの母子一体化とい

う問題も見逃せない理由だってことから書き始まっている。社会的な病理に子どもたちが罹るというのは、みんなに仕掛けられた社会的客観的要因とその子どもに固有にかけられた個人的主体的要因ということが重なった時に、子どもに病理的な現象が現れていくのじゃないかというふうに考えられるのじゃないかと思います。

４ ）データで読む日本の子どもたちの病理

ここまでは事件のことをずっと語ってきました。しかし、日本の子どもたちは事件以外で病理的な状況を示していないかといえば、そうではないわけです。

NHK は、10 年に 1 回くらい小学生や中学生の実態調査を行い、そしてそれを本にして出しています。これは 1991 年の小学生の生活と意識の調査、そして 95 年の中学生と高校生の意識の調査です。

夜眠れないとか、ご飯を食べたくないとか、何をしても楽しくないとか、そういういくつかの状況を調査でデータを示して、これは病理的な現象なんだというふうに言っています。中学生の調査でも、高学歴プレッシャーをあびた中学生、高校生はその生身の体に深い痕跡をとどめ、心身の病理となって現れるというのが結論でした。「疲れやすい」、「朝食欲がない」、「夜眠れない」、「立ちくらみやめまいがする」、「お腹が痛い」、「肩が凝る」、「頭が痛い」という現象が広がっていました。そういう軽いものからもう少し進むと、「思いっきり暴れたい」中学生が 31 ％、高校生 32 ％。「何となく大声を出したい」中学生が 26%、高校生 30%。「何でもないのにイライラする」中学生が 26%、高校生 30%。「すぐ不安になる」中学が 23%、高校生 20%。「何にもやる気がしない」中学生が 20%、高校生 24%。「何にも興味がもてない」中学生が 10%、高校生 12%となっていました。

NHK の調査は、こういう現象をとらえて、これは病理的と結論づけていたのです。同じような調査でその後を見ていきますと、このデータの値はずっと高くなっています。この『いじめで遊ぶ子どもたち』の本のなかに 2011 年版を入れておきましたが、先ほどの数字とは比較にならないくらい高くなっている。例えば、「気分の落ち込みのせいで何もする気にならないことがある」男子中学生が 34,3%、女子中学生 46,8%、男子高校生 44,8%、女子高校生 59,9%となっています。女子高校生は約 60%ですよ。

「集中したり、すばやく考えたりできないことがある」男子中学生 37,4%、女子中学生 40,4%、男子高校生 40,6%、女子高校生 47,2%。「身体の『だるさ』や『疲れやすさ』を感じることがある」男子中学生 49,8%、女子中学生 56,6 ％、男子高校生 64,6 ％、女子高校生 70,4 ％という数字になっています。つまり 20 年ぐらい前に NHK の調査が指摘をした値の約 2 倍の高さになって現れているわけです。だから、高校の先生もよくこのような子どもを前にして授業頑張っているなと思いますよ。

最近、高校生の 4 割が１日５時間ネットをやっている、朝食を食べない、睡眠時間が短くなっているとか言われています。それから別の調査でみると、女子高校生は１日平均７時間スマホをやっているという報道もあります。どうやって生活をしているのかと不思議に思うんですが、そういう数字がどんどんどんどん出てくる。子どもたちがこういうことをやっていて、どうやって自分の健康を保っているんだろうかということをすごく心配になります。

５ ）子どもたちの表現から「心の叫び」を読み解く

学校ではどんなふうに病理的な子どもたちに向き合うのだろうか、ということに話をもとに戻します。私は、「日本作文の会」に参加しているので多くの先生から作品を頂いています。

これは板橋区のある先生のクラスなんですけど、クラスがどんどんどんどん荒れて、子どもとの距離がどんどんどんどん離れていく。自分は教師になって。正義感を振りかざして、一生懸命子どもに向かっているのに、「なんでこんなに熱心に自分はいいことをやっているのに、子どもたちはどんどんどんどん自分から離れていくんだろうか」と悩みました。20 年代後半の若い先生です。「どんな風に正義感をふりまわしていたわけ？」って聞いたら、笑ったんですが、「クラスで赤いハチマキを締めて短パンで熱い教師を演じていた」というのです。その若い先生は、自分が休んだときに、子どもが「先生が学校に来れなくなったときは、心の中でヤッターと思いました」という日記に出会い、「子どもの本音を引き出したい」と強く思うようになったと言います。

●『じゅく』

ゆう

じゅく。
ハッキリ言うと、やめたいと思う時がある。
テスト。点が低い。
くやしくて、時々泣く。
（なんで、受験するなんて言ったんだろう。）
時々思う。
ストレスがたまる。
ときどきじゅくの子が、ぼくの物だけ取ったりす　る。
すごくいらいらする。
こんどやられたら、やりかえしてやる。

●『わくわく』

みき

早く榛名に行きたいなぁ。
金土日は、ずっと思っているだろう。
けど、きっと榛名では寝られないだろう。
それが一つ心配。
木曜日。
寝不足になって授業を受けてはいないだろう。
水曜日。
塾を休むから、みんなとおくれはとらないか。
心配だ。

６年生で榛名山の宿泊合宿に行く時も塾の参考書を持っていって、そして遅れるんじゃないかと心配しているのです。

私の家の近くに市の素晴らしい陸上競技場ができて、この前、神奈川県の高校陸上競技大会をやっていたんです。地域で一番成績のよい県立高校厚木高校というのがあるんです。東大に何人か入るという。僕がたまたま見に行き、県立厚木高校の応援席を見てびっくりしたのは、グラウンドでいろんな競技をしているのに、応援席で参考書を見てるですね。丁度、女子 400 mリレーの予選をやっていたのですが、何の関心もなく、熱心に単語勉強や日本史の参考書を見ている。「今日ぐらいはやめたらいいんじゃないの」ってよっぽど言ってやろうと思ったんですが、変なオヤジが出て行っておかしくなったら嫌なのでやめましたが。

●『おに』

みき

私は起きてからすぐにいやなことがおこりまし　た。
起きたときは、
「さっさと起きろ。」
と３回どなられ、ごはんを食べるときは、
「さっさと食べて。」
と、言われ、歯みがきをしているときは、
「かぎつけた。ベッドたたんで。」
と連続で言います。
それを毎日言っているのに、
つかれないのはオニのようと思いました。

●『言えない 』

なお

と
　両親とも先生。だから、
　「勉強のこととか聞けるからいいね。」
　って言われる。
　（どこが？）
　いつも思う。
　だって、夏休み前は大変そうだから口もきけない。
　話したいことあるけど、言いづらい。
　聞きたいことがあるのに、
　自分の中にためちゃうことがなれるから、
　もやもやすることが多い。
　帰ってくるのが遅い。
　夜は自分の学校の話ばかりで、うざい。
　どーでもいいよ。
　うるさい。
　でも、自分のために働いているから…
　何とも言えない。

　うちは３人の娘が大学にみんな入ったんですが、僕が何気なく「教職とったらいいんじゃない」って言っても、3 人とも「絶対教職はとらない」って。「免許とるだけだったら取ればいいじゃない。」と思ったんですが、誰もとりませんでした。やっぱり先生の生活を見ていたから、なりたくないと思ったんでしょうね。
　こうした子どもの内側に抱えている叫びやつぶやきを聞いてくれる人が学校の中にいたり、周りにいれば、子どもたちは、それをどんどん表現してくる。そして、解きほぐされていく。そこにヒントがあるような気がするわけです。
　二つめに、「村山士郎教育論集　第一巻」のなかで紹介したことなんですが、様々な事件を犯して少年院に入った子どもたちの本当の声です。静岡県の安倍川少年院ではその子どもたちに、「ぼくの一言、僕の胸の内を聞いてください」という取り組みをしている。その冊子からいくつか読んでみます。

　●中学校の先生へ
　僕は勉強が嫌いだし、バカだよ。だけど除け者に　せず、仲間に入れて欲しかった。
　先生、僕たちの気持ちを理解して欲しい。学校は　好きだもん。
　一番大切なものは勉強ですか。　　勇樹

　●「お前が学校へ来ると、まじめにやろうとして　いるやつが非行の道に進んでしまう。お前は学校　のガンだ。」
　相談室で言われた一言。でもあんまりです。
　　芳和

　●母へ
　「お前なんか、鑑別所でも、少年院でも入らなく　ちゃ分からないんだ！」
　口ではきつく言っていたけど、僕が警察に連れて　行かれる時の母ちゃんの涙は、一生忘れません。
　　一輝
　●「こんな家に、なんでぼくを生んだんだよ。」
　ほんとうに辛いことを言って、ごめんなさい。
　今は、この家族に囲まれて幸せを噛みしめています。
　　満

　●父へ
　「やってしまったことはしょうがない。二度と繰　り返すな。がんばってこい。」
　審判のあと、一緒に泣きながら言ってくれたこと　ばは忘れていません。
　　行宏

　●審判で「息子はいじめられっ子なんです。いつ　も殴られて帰ってくるんです。たまたま、殴った　からといって、少年院とはあんまりだ。それより　も親に責任がある。一方的に息子を悪くしないで　ください。」と言ってくれましたね。
　僕をかばってくれる父の気持ちは忘れません。
　　智生

●仲間へ

少年院に来て、茶髪を切り落とし、イヤリングを　はずしたら、肩の力が抜け、気持ちが軽くなった。

今まで、自分の存在を誇示したい一心で、見栄や　虚栄を張っていた自分を知った。

君たちもやってごらん。楽になるよ。

敬志

●裁判官へ

「お母さん、子供がこうなってしまったのは、親　のあなたの責任ですよ。分かっているんですか、

ほんとうのお母さんなんですか。」

審判の時、あなたが言った言葉です。

裁判官！　少しは母の気持、ぼくの気持ちを考え　てものを言って下さい。

典幸

●少年院の先生へ

親から「もう引き取らん」という手紙が届き、ぼ　くが泣いていると、そばにきて黙って一緒に泣い　てくれた先生、不思議と胸のつかえが取れていき　ました。

良太

こういう子どもたちの外には出せないできた内面にことばを与えていく、そうすれば子どもたちは自分でそれを綴っていきながら、新しい道を開いていくというような取り組みもあるのではないでしょうか。

それに比べて、川崎のあの少年たちに対する社会的な目は冷たいと思うんです。やったことが善いとか悪いとかいえば、もちろん悪いことです。許されないことをやっているんです。彼らはね。しかし、彼らにも小学校時代があり、中学校時代もあり、そして今は 18 歳、17 歳になったけれども、その前に大人から学校からどんな目をかけられてもらった子なんだろうか。学校から追い出されてしまった子だったんだろうか。小さいときからの彼らが育った環境を抜きにして、逮捕されたから、何かみんなホッとしているようなニュースとして流れていますが、本当にそれでいいのかと思います。

川崎にはさっき言ったような貧困社会がまだまだ広がっている。そういう地域があり、どういう事情か知りませんが、お母さんはフィリピンの女性の方だと報じられています。そういう中で、地域の人たちや仲間の目も、いろんな目が彼らに向けられていたのではないか。そういう中で彼は、いろいろな道を辿りながら結果としては、あのような事件を犯してしまったのではないか。

だから、彼らを社会から除外をして、そして裁きを受ければ事が済んだというような捉え方で本当にいいんだろうかというふうに思うわけです。そしていろんな人のコメントを見ていても、ソーシャルワーカーをおくとか、地域社会の関係をつくらなきゃいけないとか、いろんなことを言っています。でも、子どもそのものについて、18 歳の子をもっと暖かい目で見てあげようとしてる人は、ほとんどいないです。僕はそれは違うと思うんです。

さっきの鑑別所で向かい合っているような目で、あの 18 歳や 17 歳の子たちを見てあげなきゃいけない。逆に上村君は何故、夜、家に自分の居場所がなかったのか。これも週刊誌の情報で本当かどうか確かめていませんが、お母さんに好きな方が出来て、その男性が家に入ってしまう。中学１年生の思春期の多感な子が、狭い家の中で夜家にいられない、そういう問題を考えてみなければいけないのではないか。上村君は小学生の時、島の方から来て、いろんなことで頑張ってバスケットもやっていたというような書き方だけでいいのか。彼はなぜ夜中に家を出ていたのか、「家の中に居場所がなかったのではないか」という問題をも考えていかなければいけないと思います。家の中に自分の居場所がない子どのたちの問題です。

とはいっても誰も夜中に遊んでくれる人はいない。逮捕された少年たちはいじめながらも、暴力を振るいながらも、「仲間」と思えるように扱ってくれたんではないか。とても悲しい現実があの事件には隠されていて、あの犯罪を犯した少年たち、犯罪自身は許されなけれど、同時に、犯罪に走った少年たちは川崎の小学校、中学校ではどんな子どもたったか、どこかで救えなかったのだろうとかという問題を、もっともっとみんなで討論してもいいのではないかと思うわけです。

６ ）おわりに 「子どもたちを再び戦場に送るな」

最後になってしまいましたが、私は、今話したことは、子どもたちの命の問題というふうにくくられるのではないかと思います。

去年 7 月に安倍さんが閣議決定をして、集団的自衛権を行使できるように憲法解釈を改めるという記事を見て、珍しくカーっときたんですね。それで 1 ヶ月もかからずに、『子どもたちを再び戦場に送るな』を書き上げたんです。どこも出してくれなくて、新日本出版社にお願いして出してもらったんです。

この中に書いたんですが、やっぱりこういうことだけは言えると思うんです。「日本の子どもたちはその時代時代に憲法を学んで、たくさんの詩や作文を書いてきている。あるいは社会科の学習の中でたくさんの発表をしてきた。二度と戦争はしないという憲法原理を生活のなかで書き綴り、学校のなかで学び合ってきた」

日本の教師や親たちは、子どもの命を何よりも大切にし、二度と戦争はしてはいけないという戦争反省を子どもと一緒に学んできました。

この前、（ヨーロッパで）戦勝記念というのをやりましたが、それはあくまでも「戦勝記念」なのです。あらゆる戦争を廃絶しようという呼びかけではありません。つまり、自分らは勝者だと言うけど、あらゆる戦争は善くないというのは言ってません。アメリカは原爆を落としたけれども、そのことを本当に子どもたちには伝えていません。

日本の先生方は、本当に戦争は、どこの国とやっても、誰がやっても、善くないことなんだということを、子どもたちに伝えてきました。そういう遺産を持っている国なんだと思います。日本の教師たちの誇るべき努力の結晶であって、こういうことは世界遺産に登録されるようなものなんだと。本当にたくさんの実践記録や子どもの作品が日本の北海道にも東北、いろんな県に残っているわけですよ。その中から僕はいくつか作品を選んで、この本の中に入れました。

時間がないので読みませんが、一つだけ話をしておきます。

私は、昭和 19 年（１９４４年）に生まれて、昭和 26 年(1951 年)に小学校に入りました。小学校は山形県の東根小学校（現東根第一小学校）で当時 1,600 人の生徒がいる学校だったんです。当時、体育館で映画教室というのをやりました。よくフィルムが切れたりして、蒸し暑いところで観せられました。今でも忘れられないのは『広島』という映画を観たときのことです。みんな怖くて観ない、観れないんですよ。だからみんな床に突っ伏して、誰かに聞くんです。「終わった？　終わった？」って。誰も観てないから終わったって言えない。で、しょうがないから顔をすこしあげて観てました。

全国で映画『広島』をみた当時の子どもたちの作品がたくさん残っています。僕は書きませんでしたが、映画は観ました。後で考えたら、女優の山田五十鈴さんが屋根の下から髪をボーボーとして出てきて、風が吹くなかに一人立って、もう体がボロボロにちぎれているシーン、それだけが頭に残っています。

国語の教科書にたくさん戦争文学が入っています。『ちいちゃんの影おくり』とか。そういうことを日本の先生方は本当に、熱心に子どもた

ちに伝えてきたのです。今だからこそ、そういう実践をもう一度学校のなかで広げていったり、取り組んでいくといったことが必要なんではないか。

僕は神奈川県の相模原市というところに住んでいます。みなさんもご存知でしょうが、去年「憲法 9 条にノーベル賞を」、という運動が起こりました。それを発議したのは、高須さんという 39 歳の２人のお子さんを持つお母さんです。相模原市に住んでいます。「9 条の会」とは、全く関係のないところにいた人なんですが、ある時次のような発言をしたのです。

「私は幼い二人の子どもを抱えている母親です。子どもたちの可愛らしさ、愛しさは国を超えて、人権を超えて、万国共通だと実感しています。でも、戦争になれば必ずどこかの国の子どもたちは戦争に巻き込まれる。恐怖と悲しみに突き落とされます。戦争をしない憲法を変えたら大変なことになります。自分の子どもだけでなく、世界の子どもたちを守りたい」

「相模原の 9 条の会」、私も所属しているんですが、そこが支援をして「憲法 9 条にノーベル賞を」の運動が広がったのです。本当に素人の集団なんです。退職した先生とか、お母さんたちとか、みんな集まって、ものすごい勢いで署名が集まり、大きなうねりになっていきました。

だから、全くの素人集団でも本当の声が、日本のいろんな人に受け入れてもらえるんだということで、教育の分野でもこの戦争法案というものに対峙するような運動をしていく必要があるのだろう。

最後です。佐世保の少女です。少女は小さい時から優秀であることを、勝ち抜き続ける期待をかけられ、必死で戦い抜いてきたのではなかったではないでしょうか。彼女は毎日毎日勝ち抜かなければいけない競争という戦場にいたのです。いわゆる軍隊と軍隊が戦う戦争ではないけれど、彼女は戦場のような学校で生活をしていたのではないか。ここに日本の子どもたちの、もう一つの「戦場」を見ることができます。日本の子どもたちは学力と能力競争に追い立てられ、日々勝ち抜かなければいけない戦場に立たされているのではないか。私たちはこの競争という戦場に子どもたちを追い込んでいるのではないか。

そして、子どもたちのしなやかな感性や大きな発達、可能性を殺してはいないのかという、そういう意味で今、戦争をする国にしてはいけないけれども、現に子どもたちは戦場のような環境に追いやられている。そしてお互いに殺し合ったり、自分を殺したりしている現実があることを、もう一つの側面として見ていく必要があるだろうと思います。私の話はこれで終わります。